



楷

第四十三号

岡山大学
附属図書館報
OKAYAMA UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN

KAI
No.43
2006
OCTOBER

<写真>
しびら

「備前国備中国之内領内産物絵図帳」より（岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵）

目 次

図書館機能と大学（附属図書館鹿田分館長 大塚愛二）	p. 2
学術機関リポジトリの形成に向けて（電子情報係長 北條充敏）	p. 4
平成19年度予約電子ジャーナルの見直しについて（情報管理課長 藤井明）	p. 8
貴重資料の教育普及と地域コミュニティ（電子情報係長 北條充敏）	p. 11
マスカット	p. 13
データベース講習会、池田家文庫絵図展、資生研公開、ほか 会議・研修・編集委員会から	p. 17

図書館機能と大学

大塚 愛 二

大学の図書館は、大学設置基準第36条と第38条に基づいて、整備されている。このように、大学に必ず備えるべき施設とされているのは、その果たす機能が大学本来の機能と密接に関連しているからである。

そもそも、人類を含む地球上の生物は、DNAの塩基配列による遺伝子によって、生命の基本情報を次世代に伝えている。多くの生物は、主としてこの情報を頼りにして、生きているのである。他の個体と情報を共有するのは、かなり高等な動物に見られる現象である。そのための基本的な器官が脳である。鳥類や哺乳類では、子育ての過程で、親から子へ、生きていく術、餌のとり方や危機管理などをそれぞれの方法で伝授している。脳と言語の著しい発達を得た人類は、他人が経験したことや過去の人々が経験したことまで、多くの情報の共有を獲得することができるようになった。ここまでは、生物学的な発達によって情報の共有量の増大を図り対応できたわけであるが、脳の能力にも限界があった。それを超える一大革命が、文字と紙の発明であろう。紙に書かれた文字は、文書情報として正確に、同時代のその文字言語を理解する人々に伝わった。また、保管することによって、時代を超えて正確に情報を後世に伝えた。

大学は、学術を修め研究する場として発達してきた。そのような場には、書物が欠かせなかった。それは、過去の人たちや同時代の人たちと学術情報を共有することができるからである。手書きで写していた書物(写本)は、活版印刷の発明によって、飛躍的に増刷することができるようになり、大学をはじめとする学問を修める場の数を増やすことができるようになり、より多くの人が学ぶことができるようになった。

20世紀の終わりごろ情報技術に革命的变化が起きた。新しく開発された電子情報機器とそれを扱うソフトウェア、それらを結ぶネットワークは、学術情報の共有の面でも大きな変化をもたらした。情報の加工に要する時間、情報貯蔵に要する物理スペース、そして情報入手に要する時間を、より早く、より小さくした。単位時間当たりに入手しうる情報量は飛躍的に増大した。このため、21世紀初頭の我々はめまぐるしいまでの変革の嵐に見舞われている。

情報技術の革命により、原稿の作成から出版・購読・閲覧までの情報共有プロセスが、年とともに変化している。技術は日進月歩で進んでいるのだが、誰が情報の共有に責任を負うて実施するかのシステムが追いついていない。紙媒体の時代には、情報の加工から配布までが極めて煩雑なプロセスを含んでおり、学術雑誌・図書の出版は、出版社がもっぱら行ってきた。情報技術旧来の出版社システムを中心に物事が進んだ結果、現在大問題となっている電子ジャーナルの高騰化がある。本来、ネットワークシステムというのは、情報共有に関するコストを分散し、共有可能な情報量を飛躍的に増大させるはずのものである。しかしながら、紙媒体の旧システムに全ての業務を任せている結果、コストの出費は分散せず、その分、情報の売買市場の動向は、システムを担っていて著作権を掌握しているものに偏向したのである。最も汗をかいた著者ですら、高い代価を支払って自分の著作を閲覧するという矛盾がそこにある。その結果、財源のない大学や分野は、電子ジャーナルの恩恵に浴することができず、情報を入力するのに手間をかけなければならなくなり、そこに情報のスピードと量の大きな格差が生じてしまう。もちろん財源の確保には今後一層努力すべきであ

るが、新しい情報技術に見合った新しい情報共有システムの構築こそが肝要である。

新しい情報共有システムとはどのようなものか。原稿の作成までは、これまでと同じで、査読システムも学協会等を中心とした制度で今もボランティア的に行われているので、その延長でよいと思われる。査読も情報技術の進歩により、郵送コストを抑え、よりスピーディに行われるようになってきている。査読後の原稿を加工する経費をできるだけ削減し、PDF ファイルなどのように共有しやすい電子ファイル化する。できあがったファイルは ×学会査読済みの認定付で、何らかのレポジトリに貯蔵し、そことデータベースを直結する。今、岡山大学で取り組んでいる機関リポジトリも近いものであるが、更に踏み込んだものが必要となる。

我々研究者は、自分の研究成果が1人でも多くの人に閲覧され、評価され、利活用されていくことを望んでいることを自ら認識し、そのためのシステム作りをグローバルに構築したいものである。

資料【大学設置基準・抜粋】

第三十六条 大学は、その組織及び規模に応じ、少なくとも次に掲げる施設を備えた校舎を有するものとする。ただし、特別の事情があるときは、この限りでない。

- 一 学長室、会議室、事務室
- 二 研究室、教室（講義室、演習室、実験・実習室等とする。）
- 三 図書館、医務室、学生自習室、学生控室

- 2 研究室は、専任の教員に対しては必ず備えるものとする。
- 3 教室は、学科又は課程に応じ、必要な種類と数を備えるものとする。
- 4 校舎には、第一項に掲げる施設のほか、なるべく情報処理及び語学の学習のための施設を備えるものとする。
- 5 大学は、校舎のほか、原則として体育館を備えるとともに、なるべく体育館以外のスポーツ施設及び講堂並びに寄宿舎、課外活動施設その他の厚生補導に関する施設を備えるものとする。
- 6 夜間において授業を行う学部（以下「夜間学部」という。）を置く大学又は昼夜開講制を実施する大学にあつては、研究室、教室、図書館その他の施設の利用について、教育研究に支障のないようにするものとする。

第三十八条 大学は、学部の種類、規模等に応じ、図書、学術雑誌、視聴覚資料その他の教育研究上必要な資料を、図書館を中心に系統的に備えるものとする。

- 2 図書館は、前項の資料の収集、整理及び提供を行うほか、情報の処理及び提供のシステムを整備して学術情報の提供に努めるとともに、前項の資料の提供に関し、他の大学の図書館等との協力を努めるものとする。
- 3 図書館には、その機能を十分に発揮させるために必要な専門的職員その他の専任の職員を置くものとする。
- 4 図書館には、大学の教育研究を促進できるような適当な規模の閲覧室、レファレンス・ルーム、整理室、書庫等を備えるものとする。
- 5 前項の閲覧室には、学生の学習及び教員の教育研究のために十分な数の座席を備えるものとする。

（おおつか・あいじ 附属図書館鹿田分館長）

学術機関リポジトリの形成に向けて 岡山大学学術コミュニケーションの課題

北 條 充 敏

1. 学術コミュニケーション

21世紀の大学図書館は、「学術コミュニケーション（文献入手のより良い手段）」を如何に確保するかを常に考えなければならない。我が国では、国立情報学研究所（旧：学術情報センター）と全国の大学図書館によるCAT/ILLシステムの運用、グローバルILLの開始、電子ジャーナルのコンソーシアム条件交渉と導入、無償電子ジャーナルの収集、リンク集の作成など様々な行動を行ってきた。これらのことは、学術研究にとって、ストレスのない文献入手の継続・維持が、研究大学にとって非常に大切であることを意味しているように感じられる。つまり、常により良い文献入手の環境整備を整えることが、「学術コミュニケーション（Scholarly Communication）」の本質ではないかと考える。

2. 学術情報基盤（電子ジャーナル等）の危機

岡山大学にとって、「学術コミュニケーション」に関する一番の関心事は電子ジャーナルやデータベースを中心とした学術資料の基盤形成と維持ではないかと思う。2000年以降、岡山大学は紆余曲折しながらも、多くの関係する方々のご理解のもと、平成17年度には学術情報基盤の学内中央経費化によって、国内有数の電子情報資料への全文アクセス環境を持った大学へと発展した。しかし、毎年5～20%程度値上がりをする電子ジャーナル価格の高騰、為替レートの円安傾向、予算が毎年減額となる現況においては、購入可能な電子情報資料は当然減少傾向に転じてしまう。

例えば、Eを1タイトル当りの電子ジャーナル平均単価、Nを購入できるタイトル数として、下記の式で単純計算をすると、年々購入できるタイトル数は下表のとおり減少することがわかる。もちろん、このケースは電子ジャーナルをタイトル単位で購入した場合を示す。実際には、電子情報資料は、一般に価格体系は多様性がある。

$$N = 250,000 \text{ 千円} \div (E \times (1.05 \sim 1.20)^R)$$

R	0年後	1年後	2年後	3年後
(A) E=50,000 値上り 5%	5,000 タイトル	4,762 タイトル	4,535 タイトル	4,319 タイトル
(B) E=50,000 値上り 20%	5,000 タイトル	4,167 タイトル	3,472 タイトル	2,893 タイトル

一方で、世界に見る電子情報の流れは、電子ブックや電子ジャーナルのバックナンバーへと一層の広がりを見せている。一般に、カレントの電子ジャーナルが毎年支払いを要するのに対して、電子ジャーナルのバックナンバー・コレクションの価格体系は、パッケージを単位として、単年度の買い取りとなっているケースがほとんどである。

出版社によっては、カレントタイトルを1年間購入しても、翌年度以降にキャンセルしたらアクセス権が残らないところ（例：Nature Publishing Group）もある。また、2003年を機会にして、世界では無償の電子ジャーナルの増加、機関リポジトリや統合検索システムなどの新しい電子情報ツールが製品化されている。このことは、世界的な視点にたつて、大学図書館像（電子図書館像）が過去5年間とは明らかに変化していることを示している。

学術情報の基盤形成にとって重要なことは、大学の研究・教育・学習に必要な学術情報を確保し、教職員や学生が容易にかつ経常的にアクセスできることに向けて改善する点にある。

さて、2000～2005年において、我が国の大学図書館の活動を振り返ってみると、タイトル数を競うように電子ジャーナルの導入を行ってきた。例えば、コンソーシアムによるパッケージ条件の交渉、冊子体から電子ジャーナル（カレント）への変更、オーバーヘッドによる学内共通経費化を行ない、文献全文の迅速なアクセスを整備するため努力し、結果として大学教職員や学生への電子情報資料の利用普及など一定の成果を示してきた。

3. 電子情報基盤 発想の転換

しかし、新しい局面に入った現況において、価格体系の高騰、アクセス権の保証打ち切り、外貨の円安傾向などマイナス要因が重なって表面化している。限られた財源の範囲で考えなければならぬ現状において、電子情報にアクセスできる範囲は毎年狭くなることは先にも述べた。この状況を見直すためには、大学レベルの大きな「発想の転換」を行い、共用性や二次的な波及効果につなげるべきである。

岡山大学は、今後もカレントジャーナルばかりを購入していいのだろうか。毎年、限られた予算で電子資料を整備しなければならないのであれば、バックナンバーや電子ブックなどにも力点をおくなど、将来の電子情報資料へのアクセス環境や図書館スペースの有効利用につながる整備を進めるべきであると思う。例えば、バックナンバーは、単年度の支払いで購入した電子ジャーナルが事故や災害などで無くなる限り、一般的には初号から5年前までのバックナンバーを永久にアクセスできる点がある。また、バックナンバーの購入は、次のようなメリットもある。

毎年のように、図書館は新しい資料を購入し、また資料の寄贈を受け、研究室から古い資料の返却を受け入れている。保存場所が不足する中、資料は増加する一方である。保存スペース確保のため、資料保存棚の増設によって、図書館の「間」の空間が崩れているように思う。昨年訪れたオーストラリアの大学図書館と本学図書館の空間の第一印象を比べると、図書館の利用空間の取り方やサービスの導線に格差があるように感じた。このような悪循環を緩和させる手段として、バックナンバー・コレクションの永久アクセス権を買い取って、電子ジャーナルと重複するタイトルの冊子体を整理する方法がある。このような方法を行なうのであれば、早期に決断した方が、早くから初号までアクセス可能となるので有利と考える。

下表には、エルゼビアのバックナンバー・コレクションを全分野購入した場合のシュミレーション・パターンを示す。エルゼビアのバックナンバー・コレクションは個別に特定分野だけを買うよりも、まとめて買った方が数十%の割引があり基盤形成には有利であると思う。但し、バックナンバー・コレクションの購入年は、カレントジャーナルと過去数年分が全文アクセスできなくなるリ

スクが発生する。エルゼビアの電子ジャーナル(カレント)は、近隣の国立大学でも導入されているので他学から文献複写依頼で文献を入手することは容易である。

(案1) E社バックファイルを2008年に購入して、
2009-2010年はカレントを購入、2011年に中止した場合の
全文アクセスできるタイトル概数

購入年 (xx)	価格	カレント 20xx	過去数年分 1999-20(xx-1)	バック 1823-1998
07	76,000 千円	All Titles	All Titles	0 Title
08	54,000 千円	1 Title	300 Titles	All Titles
09	84,000 千円	All Titles	All Titles	All Titles
10	88,000 千円	All Titles	All Titles	All Titles
11	中止	1 Title	300 Titles	All Titles

(案2) E社バックファイルを2009年に購入して、
2008年と2010年はカレントを購入、
2011年に中止した場合の全文アクセスできるタイトル概数

購入年 (xx)	価格	カレント 20xx	過去数年分 1999-20(xx-1)	バック 1823-1998
07	76,000 千円	All Titles	All Titles	0 Title
08	80,000 千円	All Titles	All Titles	0 Title
09	58,000 千円	1 Title	300 Titles	All Titles
10	88,000 千円	All Titles	All Titles	All Titles
11	中止	1 Title	300 Titles	All Titles

(現状) E社バックファイルを購入しないで、
2008以降もカレントのみを購入した場合の
全文アクセスできるタイトル概数

購入年 (xx)	価格	カレント 20xx	過去数年分 1999-20(xx-1)	バック 1823-1998
07	76,000 千円	All Titles	All Titles	0 Title
08	80,000 千円	All Titles	All Titles	0 Title
09	84,000 千円	All Titles	All Titles	0 Title
10	88,000 千円	All Titles	All Titles	0 Title
11	中止	1 Title	300 Titles	0 Title

また、主要な出版社/学協会が個別買いよりも、パッケージ買いをしてもらうことに重点を置いている。パッケージ買いは、交渉の仕方によっては、有利な方向に購入条件を進める事が出来る。一方、利用する側も特定タイトルを定期購読する以外に、必要な時にデータベースを検索して、必要な文献を電子ジャーナルや文献複写依頼で入手、著者に依頼して文献を電子メールで入手するといったスタイルも浸透している。このようなことを考えると、基盤とする電子コレクションの選定は、出版社・学協会の広い学術分野における影響度などを加味しながら電子情報のコレクションやパッケージの選定を検討すべきである。どんな分野でも、関連するコレクションやパッケージは存

在するので、次年度に向けては、世の中にどんなコレクションやパッケージが存在するのか調査しておく必要があると思う。

4. 岡山大学学術情報リポジトリへの登録

大学の研究成果の多くは、学術論文として国内外の学協会や出版社に投稿を行ない、査読・審査されたあと電子ジャーナル等に掲載されて、はじめて世界中の研究者の目に触れる。ちなみに投稿・査読・出版に際して、ほとんどの場合、著作権は学協会や出版社に移譲される。このことは、世界レベルで論文の流通が主に商業ベースに依存されており、学術ベースの流通がまだまだ主流となっていないことを示している。学術ベースの論文流通とは、世界中の研究者がインターネットを通じて無償で査読された論文全文にアクセスできる世界であって、行動としては、現在「無償電子ジャーナル(オープン電子ジャーナル)の発行」と「機関リポジトリの形成」が活動の中心となっている。機関リポジトリは、大学で生産された学術成果(査読論文、紀要論文、図書、会議録、学位論文)をインターネット上に無償公開するためのショーケースである。海外の学協会や出版社の90%以上は、著者自身による機関リポジトリを通じた投稿原稿のインターネットによる公開を認めていると言われており、急速に世界中の研究機関・大学に波及している。

岡山大学では、インターネットへの公開が認められている査読論文の収集を行なっている。収集した論文は、岡山大学学術成果リポジトリの一つである「eScholarship@OUDIR」に登録して、世界中の研究者に向けて発信を行なっている。平成18年10月からは図書館で過去5年間の査読論文をSCOPUSデータベースで検索して、これらの論文の責任著者に向けて、「eScholarship@OUDIR」への登録を呼びかける。もちろん、本学教員自身から登録希望が寄せられた場合は、権利状況を調査した上で、図書館で代行登録を行なっている。

「eScholarship@OUDIR」に研究成果を登録すると、出張先など世界中どこからでもインターネットを利用できる環境があれば簡単にアクセスできる、海外からのアクセスを重要視したインターフェース、Googleの検索対象となり全文アクセスされやすくなる、電子ジャーナルを契約していない大学の研究者でも全文まで読む事が出来るなどのメリットがある。今のところ、「eScholarship@OUDIR」の認知度は低い。海外の先行的に機関リポジトリをはじめた大学でも、大学教員に機関リポジトリを認識させるためには、相当の苦勞と時間を要している。しかし、機関リポジトリのメリットを理解した研究者は、好意的に論文登録に協力してくれることが分かっている。

「eScholarship@OUDIR」については、まだまだメリットが岡山大学の教職員に理解されていないと思う。平成18年度の目標は、登録数の増加であり、その意味では教職員への啓蒙活動(パンフレット、ポスター、ホームページ、教職員への説明)が重要であると言える。一人でも多くの教職員に、「eScholarship@OUDIR」に登録してもらえるように、広報活動に力を入れていきたいと思う。まだまだ、未開の部分が多くある岡山大学の機関リポジトリ作りであるが、基本コンセプトとして「品質重視」だけは曲げてはならないと考えている。

岡山大学 eScholarship@OUDIR ホームページ
<http://escholarship.lib.okayama-u.ac.jp>

(ほうじょう・みつとし 電子情報係長)

平成 19 年度予約電子ジャーナルの見直しについて

藤 井 明

はじめに

平成 19 年度に購読する電子ジャーナルの見直し作業がほぼ完了しましたのでご報告します。この度の見直しは、平成 17 年度から始まった学術情報基盤経費（共通経費）によって電子ジャーナルを整備するという現在の枠組みに対して、雑誌価格の高騰への対応を行う初めての調整であり、この枠組みを維持発展させる上で避けることのできない作業であったと考えられます。

見直し結果の概要

先ず、見直しの結果についてまとめますと下表のようになります。見直しのベースとなった平成 16 年度購読タイトルに対して、延べ 173 タイトル約 2,100 万円が共通経費の購入タイトルから削減され、内 11 タイトル約 140 万円が教員・講座の研究費で買い支えられました。この他に、購入中止タイトルとの入れ替えを含む新規購入タイトルは、12 タイトル約 440 万円となります。

見直しの方法については後述しますが、タイトルの増減の他に重要なポイントとしてパッケージ契約による非購読誌の利用ができるかどうかという問題があります。シミュレーションの結果、大手出版社のパッケージは継続すべきものと判断しました。学会を含む中小出版のパッケージについては、個々のタイトルの選定結果に応じて選定することとし、8 割を継続することができました。

なお、継続できなかったパッケージの内、ProjectMUSEは文科系のタイトルが多く、分野間のバランスを損なうことが懸念されました。代替となるパッケージを検討した結果、JSTOR: Arts & Science Collection I が本学にとって最も利用価値が高く維持費も安価であることが分かり、新たに購入することになりました。このパッケージは、最新の5年程は利用できませんが、歴史のある雑誌が多くしかも創刊号から利用できるため、今後活用されるものと期待されます。

また、IEEE (Institute of Electrical and Electronics Engineers)のパッケージについては全雑誌をカバーするパッケージの維持が困難だけでなく個別タイトルの購入は冊子となるため、相当額をもって会議録のパッケージ (Proceedings Order Plan (POP)) を購入することになりました。

表 1 . 平成 19 年度予約電子ジャーナル見直し結果

項目	タイトル	価格合計	備考
見直し対象	1,360	233,892,042	
削減対象	173	21,458,345	
内、買い支え	11	1,459,350	
他、講座費等から抛出	-	5,885,797	

	タイトル	価格合計	備考
共通経費削減効果	-	27,344,142	+
共通経費支出予定	-	206,547,900	- -
買い支え・抛出	-	7,345,147	+
支出予定合計	1,198	213,893,047	- +

注 1) 平成 18 年 10 月 13 日現在の集計結果。価格は個別タイトルの平成 19 年度予想価格による。

注 2) タイトル数は、平成 16 年度購読タイトルから電子化されたもので、電子ジャーナル検討の基礎としているもの。学部間重複あり。

注 3) 実際の支出においては、重複の解消等による合理化を行い共通利用のためのパッケージを買い支えている。

表2. 学会及び中小出版社電子ジャーナルのパッケージ見直し結果

項目	パッケージ数	価格(円)	項目	パッケージ数	価格(円)
見直し前	27	52,644,552	中止	7	12,785,091
見直し結果	22	47,363,608	新規購入	2	7,504,147

学術情報基盤経費の枠組みについて

雑誌の高騰は学問の発展・細分化及び学術コミュニケーションの発展に伴う構造的な側面を持っており避けることができません。岡山大学においては、平成12年度までは雑誌タイトル数を漸減させつつも予算を増額して2,500タイトル以上を維持して参りましたが、平成13年度以降は毎年7%前後の予算を増額しても8%前後のタイトルを削減せざるを得ない状況となりました。これに加えて、平成16年度からの国立大学法人化によって予算の配分方法が変更された結果、これまでのような講座費等に多くを依存する方式では全く維持できない危機的な事態となりました。

このような事態に対して迅速に対応がなされ、平成16年8月までに附属図書館運営委員会、教育研究評議会での審議、部局長への説明を経て次のような趣旨の予算化が認められました。

特別配分経費から1億円、教育環境整備費及び部局長裁量経費から各5千万円の計2億円の共通経費を新たな財源とし、従来からの学生用図書費及び学内共通利用雑誌費1億円を加えた3億円で電子ジャーナル、データベース及び学生用図書を賄う。

電子ジャーナルは、このようにして確保された共通経費から次のような原則の下に一層本格的に充実を図られることとなりました。

- (1) 平成16年度に購入していた外国雑誌のタイトルに基づいて電子ジャーナル化する。
- (2) 共通経費で購入する外国雑誌は電子ジャーナルに限る。

学内で重複して購入していた外国雑誌が電子ジャーナルに集約される等の合理化効果によって各種のパッケージを購入することができ、平成17年度からは従来の3倍近い18,000タイトル以上の電子ジャーナルが利用できるようになりました。この枠組みは、ほぼ完全に共通経費化を達成したという意味で大変画期的であり、真に「学術情報基盤」が形成されたものと評価することができます。

雑誌高騰への対応について

雑誌の値上がり率は年平均7~8%、国立大学のコンソーシアムによる大手出版社のパッケージの代表例では値上げ率がキャップされますが年5%あり、絶えず値上がりしています。

他方、共通経費化された新しい予算の枠組みでは予算の増額が大変難しく、従来各教員・講座の努力によって増額が可能であったようには参らないという問題が内包されています。平成18年度までの2年間は、合理化効果によって利用できるタイトルを増加させることさえできましたが、3年目となる今回の見直しでは高騰に対する調整は避けることのできない問題となりました。

予算の限界について

先ず「学術情報基盤」を1年でも長く現状を維持できないか検討いたしました。痛みの少ない調整を行うだけでは毎年2千万円規模の不足が上積みされ、数年後には毎年1億円以上の補填を行う必要であること、これを運営費交付金で賄うことは経営的に不可能であることが分かりました。

また、現在の状況では予算の上積みも期待できないばかりか毎年1%以上減額されること、為替レートの変動に対するバッファとなる予算が4千万円程度の学生用図書費のみという構造的な限界

があることから、予算上の規律を厳しく守ることの必要性が確認されました。

結論として、電子ジャーナル及びデータベースに掛ける予算を2億5千万円(19年度)に押さえ、これに相当する金額までは全学の共通基盤として今後も維持するが、これ以上の整備を必要とする分野については関係教員・講座の努力によって維持して頂くしかないということになりました。

見直しの方法について

見直しの方法として主な点は次のようなものです。

- (1) 総合大学の共通基盤として形成されてきた現在の分野間のバランスが保持されること。そのためには、平成16年度の購入タイトルを基準に見直しを行うこと。
- (2) 電子ジャーナル化できなかったタイトルが比較的多い文化系分野の充実にも配慮すること。
- (3) 各分野のタイトルの見直し作業は、平成16年度の検討で強く否定された受益者負担の考えを慎重に避けながら、各学部の専門的見地で全学的視野をもって行って頂くこと。
- (4) 具体的には、平成19年度の個別タイトル購入予想価格を掲載したリストによって分野別に「選定枠」と「削減割当額」を示し、その選定結果を得た後にパッケージの購入を検討すること。
- (5) 全体に満遍なく削減するとほとんどのパッケージを維持できず、利用できるタイトル数が10分の1近くまで激減する。これを避けるため、利用の多い大手出版のパッケージは維持すること。
- (6) 学会を含む中小出版のパッケージについては、個々のタイトルを単独で購入するよりもパッケージで購入する方が安く購入できる場合か差額を補填できる場合にのみ購入すること。
- (7) 現状のまま予算を固定すると数年内にはほとんどのパッケージを解約せざるを得ないが、その時になっても分野間のバランスが保持されること。
- (8) 将来の可能性を開くため、共通経費以外の予算による買い支えに道を開くこと。適用条件がクリティカルで事務の負担増も避けられないが、外部資金による買い支えを受け入れること。
- (9) 学問の発展や研究者の異動に対応するため、新規タイトルとの入れ替えを可能にすること。

まとめ

今回の見直しは以上のように実施しましたが、いくつかの問題点を残しました。

- (1) 学問分野によって依存する出版社のタイプが異なるため、今回のように大手出版社のパッケージを維持することに一部の学部から強い異論が出されました。この点は、岡山大学全体の視点で共通基盤を維持するという観点からやむを得ない選択であったと考えますが、次回以降は同じ方法を繰り返すことなく全体のバランスを崩さないよう配慮せねばなりません。
- (2) 各学部での検討を夏休み中にお願ひせねばならなかったという検討スケジュールの問題は、次回以降は必ず改善する必要があります。
- (3) 今回は各学部の運営費交付金から相当額を補填して頂きましたのである程度激変を避けることができたと思いますが、運営費交付金を財源とする限り限度があります。

米国のある大学は1兆円規模の基金と1千万冊以上の蔵書をもっているといわれています(岡山大学は200万冊)。今回の見直し作業を通じて、外部資金の開拓、学部・教員・学生の垣根を越えて全学の資源を共同利用することによる総力戦、一般企業の経営に学ぶ選択と集中...といった思い切った戦略を立てることが必要な段階に来たのではないかという思いを強くいたしました。

今後とも学術情報基盤の形成にご協力くださいますようお願いいたします。

(ふじい・あきら 情報管理課長)

貴重資料の教育普及と地域コミュニティ

北 條 充 敏

1. 大学図書館の地域連携を考える

大学と地域の連携が叫ばれるなか、大学図書館も地域に開かれていなければなりません。なぜ、大学や大学図書館は地域に開かれてなければならないのでしょうか。一つには、国立大学の運営が公の資金によって成り立っていることに対する社会的な説明責任であると言えるでしょう。また、大学の多くは、歴史的に見ても、地理的に見ても、地域との関係の中で育まれており、地域の活性化や地域住民のために大学の持つ資源・活動成果・資料や施設を還元することは当然の流れであると言えます。

これまで大学図書館は、大学の研究・教育への貢献を大義として、教職員・学生のために必要な資料を購入/整理/配架/閲覧/貸出する他に、参考調査や文献入手のお手伝いなどのサービスを行ってきました。また、時代の変化にあわせて、目録情報のデータベース化、貴重資料の電子化、電子情報（電子ジャーナル、データベース、インターネット）の提供などにも対応してきました。しかし、今は、社会はネットワークやデジタル技術の高度化、我が国の少子高齢化、生涯学習時代の到来、国際化やグローバル化、アジア諸国との緊密化、地球環境の悪化、住民参加の行政などめまぐるしく変化しています。このような社会の変化で、大学図書館も従来型から一歩すすんだ地域に開かれた考え方や体制および行動が求められているように思います。ここでは、岡山大学附属図書館における貴重資料の教育普及に関する地域連携構想について述べることにします。

2. 貴重資料の教育普及

岡山大学附属図書館は、平成14年度から平成16年度にかけて、岡山県立図書館（平成14年度）や岡山市デジタルミュージアム（平成15/16年度）との連携によって、池田家文庫絵図のデジタル化を行なった経験をもっています。この経験を後世にも継続するために、平成16年9月に岡山大学と岡山県、平成17年2月に岡山大学と岡山市の間で「文化事業協力協定」を結びました。特に、岡山市との連携では、絵図デジタル画像を学校教育分野に活用し、子どもたちが郷土の歴史に触れる機会を与えることを目的としています。しかし、子どもたちに絵図デジタル画像を活用し、郷土の歴史を指導するためには、岡山の歴史に通じた豊富な知識や教え方への工夫など多才な能力が必要であることがわかってきました。昨年からは学校教員にも、絵図資料を閲覧してもらっていますが、共通した意見として出てくるのが、「絵図そのものは、岡山のことが描かれて面白い。解読できれば活用してみたい。」教育現場で使うには難しい。学校教員が絵図資料を理解しなければならないが、それだけの時間が取りにくい。絵図を読みこなせる学校教員はそんなにいないのではないのでしょうか。」という意見でした。

これらの意見は、池田家文庫絵図を学校教育に活用することは間違っていないことと、教育普及の成功のためには相当に苦労を要することが分かりました。しかし、簡単に諦める必要はなく、粘り強い活動が大切と思いました。

3. 地域との協力関係が要

岡山大学では、貴重資料の教育普及のために、学内に「岡山大学貴重資料等デジタルコンテンツ作成委員会」という委員会を作っています。委員会は年1回(7月)行なって、前年度の活動報告と当年度の活動計画の審議を行なっています。しかし、この委員会だけでは、大学からの内部的な視点のみで考えるので、実りある普及活動につながっていないと考えています。これまでは、「池田家文庫絵図」「デジタル画像」「教育普及」をキーワードとして普及活動を行なってきましたが、今以上に岡山に生活する人々に「池田家文庫絵図」を身近な存在とするためには、新たなキーワードとして「まちづくり」「ワークショップ」「人的ネットワークの形成」のキーワードが大切になると考えています。貴重資料をもっと岡山に生活する人々に身近な存在とするためには、地域住民や歴史専門家とも連携・協力しあえる活動を早期に実証しなければならないと考えています。

誰でも、ふるさとの歴史には興味があるもので、歴史から学ぶところは数多くあると思います。そういった意味では、こどもや大人たちが自ら自分たちのまちや村の歴史を再発見するための、ワークショップが一番よい方法であると考えています。そこには、歴史の専門家と地域リーダー的な方の協力が不可欠ではないかと考えています。今年度は、実証実験として、後楽園を舞台にした親子ワークショップを12月に開催しようと企画・準備を行なっています。このワークショップでは、江戸時代に描かれた絵図「御後園絵図(文久3年)」と現在の後楽園の「同じところ」と「違うところ」を、拡大絵図や後楽園内の探検を通じて、自分で発見・考え・発表してもらいます。一步すすんだ後楽園の姿をこどもたちにも理解してもらいたいと考えています。こうしたワークショップ活動こそが、教材作りの第一歩になるのではないかと考えるとともに、ワークショップの開催および継続が、岡山大学(附属図書館)と地域との橋渡しになればと考えています。

岡山大学附属図書館 貴重資料の教育普及ホームページ

<http://www.lib.okayama-u.ac.jp/edc/>

(ほうじょう・みつとし 電子情報係長)



マスカット

データベース講習会開催のお知らせ

データベース提供各社より講師を招いて講習会を開催します。多数のご参加をお待ちしております。参加ご希望の方はお早めにお申し込みください。

津 島 地 区	Lexis.com (実習つき) 日時：10月19日(木) 10:20~11:50 会場：附属図書館 中央館 新館1階 AV 演習室 対象：本学法学部または法務研究科所属の学生・教職員	<お申し込み先> 参考調査係 (内線 津島 7322)
	Web of Science (実習つき) 日時：10月20日(金) 10:20~11:50、12:40~14:10 会場：附属図書館 中央館 新館1階 AV 演習室 対象：本学学生・教職員	
	SciFinder Scholar (デモのみ) 日時：10月20日(金) 10:20~11:50、14:20~15:50 会場：附属図書館 中央館 新館1階 AV 演習室 対象：本学津島地区または鹿田地区所属の学生・教職員	
	LEX/DB インターネット (実習つき) 日時：10月31日(火) 10:20~11:50 会場：附属図書館 中央館 新館1階 AV 演習室 対象：本学学生・教職員	
	ScienceDirect (実習つき) 日時：11月9日(木) 10:20~11:50 会場：総合情報基盤センター 情報実習室4 対象：本学学生・教職員(要ユーザー登録)	
鹿 田 地 区	Web of Science (実習つき) 日時：10月20日(金) 16:20~17:50 会場：鹿田情報実習室1(附属図書館 鹿田分館3階) 対象：本学学生・教職員	<お申し込み先> 鹿田分館図書係 (内線 鹿田 7053)
	医中誌 Web (実習つき) 日時：11月8日(水) 10:20~11:50、13:00~14:30 会場：鹿田情報実習室1(附属図書館 鹿田分館3階) 対象：本学鹿田地区所属の学生・教職員	
	ScienceDirect (実習つき) 日時：11月9日(木) 16:20~17:50 会場：鹿田情報実習室1(附属図書館 鹿田分館3階) 対象：本学学生・教職員(要ユーザー登録)	

戦さと城 ～池田家文庫絵図展～のお知らせ

例年、秋に開催しています岡山大学附属図書館所蔵の「池田家文庫」絵図展を、昨年に引き続き、岡山市デジタルミュージアムで開催します。今回は、関ヶ原の戦い、大阪夏の陣、島原の乱など、江戸時代はじめの戦場図を中心に展示します。重要文化財「信長記」も展覧の予定です。

開催期間は、平成 18 年 10 月 26 日(木)～11 月 12 日(日)の 10:00～18:00 ですが、岡山市デジタルミュージアムは、月曜日が休館ですので、10 月 30 日・11 月 6 日は展示会もお休みです。

また、11 月 4 日(土)13:30～15:00 は、『長久手合戦図屏風』の世界」と題して、茨城大学人文学部 高橋修教授の講演会が予定されています。同日には、10:30～12:00 に、小・中学生向けの、ミュージアムジュニア講座・ワークショップも開催されます。会場内のデジタルコーナーでは、大型画面で絵図を見ていただけます。画面上で絵図を縮小・拡大してお楽しみ下さい。入場料は、無料ですので、ぜひご来場ください。

資源生物科学研究所分館一般公開について

平成 18 年 5 月 13 日(土)に資源生物科学研究所の一般公開が行われました。これは一般市民の方々に研究内容などを公開し、研究所について知っていただく行事です。毎回 400 人以上の参加者があります。

今回も実験デモ、バイオ実験の体験など、参加者の方が目で見て触って楽しめるように最新の科学を紹介しました。また新しい試みとして、各展示ブースでクイズを出題し、正解された方にカブトムシの幼虫などを差し上げるクイズラリーが行われました。

図書館では、史料館の一階にて、貴重書の一部である「蕃語考」「甘藷百珍」「農政全書」「Pflanzenphysiologie」などを展示し、展示図書に関連するクイズを出題しました。

来館された方々にはダーウィン自筆サイン(複製)入りしおり・菊の絵葉書を差し上げました。約 200 名の方が来館されました。

オリエンテーション・ガイダンス(中央館)

本年 4～6 月に以下のとおり実施し、延べ 1,653 人の方にご参加いただきました。

<図書館オリエンテーション>

実施日：4 月 6 日～6 月 24 日 実施回数：50 回 参加人数：1,560 人

内容：中央館利用方法・規則の概説、蔵書検索のデモ、館内ツアー

<入門・蔵書検索>

実施日：6 月 7 日～6 月 14 日 実施回数：4 回 参加人数：4 人

内容：本学蔵書検索の概要説明、蔵書検索システム実習、カード目録の説明

<文献探索・入手支援ガイダンス>

実施日：4 月 26 日～7 月 14 日 実施回数：10 回 参加人数：65 人

内容：文献探索の流れの概説、データベースの紹介・検索実習、文献情報の見方の説明、文献の取り寄せ方の案内、など

<その他(教員の要請による実施)>

- ・ 聞蔵 DNA for Library II 説明会(実施日：4 月 28 日 参加人数：8 人)
- ・ NDL-OPAC 講習会(実施日：5 月 19 日 参加人数：8 人)
- ・ 雑誌記事索引説明会(実施日：6 月 2 日 参加人数：8 人)

オリエンテーション・ガイドンス（鹿田分館）

学部等から依頼を受け、次の利用案内を実施しました。

- ・ 医学部保健学科新入生オリエンテーションにて（利用案内）
- ・ 医学部 3 年次編入生オリエンテーションにて（利用案内・館内ツアー・時間外利用講習）
- ・ 順正高等看護専門学校 3 年生オリエンテーションにて（利用案内・館内ツアー）
- ・ 医学部医学科新入生オリエンテーションにて（利用案内）
- ・ 医歯学総合研究科修士課程新入生オリエンテーションにて（利用案内・時間外利用講習）
- ・ 歯学部早期見学実習にて（利用案内・館内ツアー・時間外利用講習）
- ・ 医歯学総合研究科講義にて（文献検索・利用案内・時間外利用講習）

オリエンテーション・ガイドンス（資源生物科学研究所分館）

資源生物科学研究所の新入生（4/11）、農学部の新入生（5/8、15）に対しオリエンテーションを実施しました。館内を案内しながら、図書館の概要や利用方法、展示史料について説明しました。合計 143 名の方にご参加いただきました。

教員からの寄贈図書リスト

次の方々から著書をご寄贈いただきました。ありがとうございました。

中央館 教員業績コーナー（本館 1 階）に配架

太田にわ [医学部（寄贈時）]

分権時代の福祉財政（分担執筆） 敬文堂，1999 (369.11/B)

病いの子どもと家族が癒されるケア（編著） 西日本法規出版，2002 (492.925/O)

大滝英治 [名誉教授]

力学の基礎 大学教育出版，2005 (423/O)

小野芳朗 [大学院環境学研究科]

「清潔」の近代：「衛生唱歌」から「抗菌グッズ」へ 講談社，1997 (498/O)

固体・ガス状試料の安全性評価システムの開発

：一般・産業廃棄物・バイオマスの複合処理・再資源化プロジェクト

：安全性グループ研究成果報告書（グループリーダー） 文部科学省，2005 (F518/K)

廃棄物処分場の有害物質の安全・安心保障：中間成果報告書（プロジェクトリーダー）

科学技術振興機構，2005 (F518/H)

北川博史 [大学院社会文化科学研究科]

日本工業地域論：グローバル化と空洞化の時代 海青社，2005 (509.5/K)

木村 功（共著）[教育学部]

ホラー・ジャパネスクの現在 青弓社，2005 (910.26/H)

倉地克直 [大学院社会文化科学研究科]

江戸文化をよむ 吉川弘文館，2006 (210.5/K)

下定雅弘 [大学院社会文化科学研究科]

白楽天の愉悦：生きる叡智の輝き 勉誠出版，2006 (921.43/H)

- 高橋文博 [大学院社会文化科学研究科]
近世の死生観：徳川前期儒教と仏教 ペリかん社，2006 (121.53/T)
- 張 紅 [大学院社会文化科学研究科]
中国法における会社管理機構 大学教育出版，1997 (325.2/C)
- 照沼亮介 [大学院社会文化科学研究科]
体系的共犯論と刑事不法論 弘文堂，2005 (326.15/T)
- 東辻千枝子 [大学院自然科学研究科]
現代の凝縮系物理学 上・下（共訳） 吉岡書店，2000 (428/C)
科学の真実（訳） 吉岡書店，2006 (401/Z)
- 富岡憲治 [大学院自然科学研究科]
生命現象の多様なタイミング機構の総合的理解 富岡憲治，2006 (F460/S)
- 古松紀子 [大学院社会文化科学研究科]
教育の公共経済学的分析 岡山大学経済学部，2006 (371.3/F)
- 横山美江（編）[医学部]
よくわかる看護研究の進め方・まとめ方：エキスパートをめざして
医歯薬出版，2005 (492.907/Y)
- 鹿田分館**
- 山本照子（共著）[大学院医歯薬学総合研究科（寄贈時）]
歯は動く：矯正歯科臨床の生物学的背景 医歯薬出版，2006 (497.6/HI)
- 資源生物科学研究所分館**
- 中島 進（分担執筆）[資源生物科学研究所]
陸水の事典 講談社，2006 (138/118)

（敬称略五十音順）

会議

学外

18. 4.20 第 54 回中国四国地区大学図書館協議会総会
4.21 第 33 回国立大学図書館協会中国四国地区
協会総会（於 サンポート高松）
・平成 17 年度中国四国地区協会活動状況
報告について、その他
5.18 平成 18 年度岡山県図書館協会第 1 回理事会
（於 岡山県立図書館）
・平成 17 年度事業報告、
収支決算報告について、その他
5.22 平成 18 年度岡山県図書館協会総会
（於 岡山県立図書館）
・平成 17 年度事業報告、
収支決算報告について、その他
5.25 ~ 5.26 第 77 回 NPO 法人日本医学図書館協会総会
（於 ウィルあいち）
・平成 17 年度事業報告、決算報告、その他
5.30 岡山県大学図書館協議会
平成 18 年度第 1 回総会（於 中国学園大学）
・平成 18 年度事業計画、
予算（案）について、その他
6.22 中国四国地区国立大学図書館
学術情報・図書館・情報環境部長会議
（於 広島大学図書館）
・国立大学図書館協会理事会報告、その他
6.29 第 53 回国立大学図書館協会総会
（於 一橋大学）

学内

18. 6.5 平成 18 年度第 1 回附属図書館運営委員会
7.18 平成 18 年度第 1 回附属図書館運営委員会
資源生物科学研究所分館分科会
7.27 平成 18 年度第 1 回附属図書館運営委員会
鹿田分館分科会
7.31 平成 18 年度第 2 回附属図書館運営委員会

研修

- ・第 2 回国立大学図書館協会マネジメント・セミナー
参加者 小早川良規（6.28）
- ・平成 18 年度大学図書館職員長期研修
参加者 犬飼恵美子（7.3 ~ 7.14）
- ・エルゼビア・ライブラリ・コネクト・セミナー 2006
参加者 竹下啓行（7.4）
- ・平成 18 年度目録システム地域講習会（図書コース）
参加者 岡本和子（8.2 ~ 8.4）
- ・平成 18 年度著作権セミナー
参加者 久磨由美子、河本さおり（8.18）

編集委員会から

長かった夏休みも終わり、学内に活気が戻ってきました。実りの秋をむかえ、日本図書館協会全国大会、池田家文庫絵図展など多彩な行事が続きます。十月からは再び夜間、土日にも開館がされますので（詳しくは HP か図書館入口にある開館予定表でご確認ください）、ゆったりとした時間の中、これまで以上の活発なご利用をお待ちしています。

岡山大学附属図書館報「楳」 No.43 平成 18 年 10 月 1 日

発行人 藤森末雄 編集 広報誌編集委員会

岡山大学附属図書館発行 〒700-8530 岡山市津島中三丁目 1-1 電話 086-252-1111

ホームページ URL <http://www.lib.okayama-u.ac.jp/>